

<b>Title</b>	範列関係を表す複合副助詞
<b>Author</b>	丹羽, 哲也
<b>Citation</b>	人文研究. 58 卷, p.247-261.
<b>Issue Date</b>	2007-03
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科
<b>Description</b>	富田和暁教授 : 毛利正守教授 : 山崎弘行教授 : 松村國隆教授 : 小林標教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

## 範列関係を表す複合副助詞

丹羽 哲也

範列関係を表す副助詞には、副助詞・係助詞とともに、「に」に限って「に」に加えて「に」のような「複合副助詞」もある。これらを意味的に分類すると次のようなものがあげられる。「限定」(に限って)、「到達点」(に至るまで)、「順序」(を皮切りに)、「序列」(を中心に)、「除外」(を除いて)、「代替」(に代わって)、「異なり」(と違って)、「反対」(と反対に)、「追加」(に加えて)、「同一・類似」(と同様に)、「共同・分離」(とともに)、「同時」(と同時に)、「並置」(ともに)、「以外」(ほかに)、「比較」(に比べて)。これらは、範列項をどのように挙げるかという点で、「範列型」<sup>1</sup>「代表型」<sup>2</sup>「二者型」<sup>3</sup>「並列型」<sup>4</sup>に分類でき、また、他の範列項を排除するか包含するかという点で、「排他型」<sup>5</sup>「包含型」<sup>6</sup>「中立型」<sup>7</sup>に分類できる。他方、これらの範列関係は、「太郎に加えて、次郎も参加した。」のような「部分型」と「太郎が参加するのに加えて、次郎も参加した。」のような「全体型」に分けられるが、後者の複合副助詞は接続助詞と呼ぶことができる。これは、接続関係の意味的な種類の一つとして、範列関係を表すというタイプがあることを意味する。

### 一・複合副助詞とは

限定を表す「だけ」、対比を表す「は」、同類を表す「も」などの副助詞・係助詞は、当該項目と範列関係にある他の項目との間の関係(いわゆる「とりたて」)を表す。これに似て、同様の関係を表すものに、次のような複合形式もある。

- 1 うちの子に限って、そんなことはしません。
  - 2 筆記試験に加えて、面接試験もある。
- 1では「うちの子」が「よその子」と、2では「筆記試験」と「面接

試験」とが範列関係を成している。

- 3 うちの子だけは、そんなことはしません。
- 4 筆記試験も面接試験もある。

1は3と同義的であり、2は4を含意している。この「に限って」「に加えて」のような複合形式を、以下、「複合副助詞」と呼ぶ。<sup>8</sup>

これまでの研究では、「に限って」「に加えて」などはさまざまな複合辞の一つとして扱われてきていて、あまりまとまった形で考察されていない。唯一、森田・松木(一九八九)では、種々の複合辞を分類する中で、「副助詞の働きをするもの」という項目が設けられており、その中に範列関係を表すものが次のように挙げられている。<sup>9</sup>

限定・非限定を示す

に限って、に限り、ならでは、に限らず、によらず、を問わず  
 添加を示す

ばかりか、に限らず、のみならず、どころか

本稿は、より包括的に、複合副助詞がいかなる範列関係を表すかとい  
 うことを考察する。なお、ここで扱う助詞には、「代わり」「ほか」の  
 ように複合形式ではないものも一部に含むが、従来扱われていない範  
 列関係を擲いあげていくのが本稿の目的であるから、これらも合わせ  
 て扱う。

複合副助詞は、例えば「に限り」では「限る」、「に加えて」では  
 「加える」という動詞が文法化して、助詞化したものである。その文  
 法化のありようは、個々の形式によって異なる。「に加えて」では、  
 元の動詞がガ格・ヲ格・ニ格を取るが、副詞句の「」に加えて」の場  
 合、6のように、(ガ格は当然として)、ヲ格が入る余地がない。

5 監督は、スターティングメンバーに山田を加えた。

6 監督は、山田に加えて、田中をスターティングメンバーにした。

意味的に言っても、ともに「追加する」という意味ではあるものの、  
 動詞の場合は主体の意志を伴うのに対し、副詞句の場合は、

7 山田に加えて、田中も怪我をした。

のようにそれを伴わない場合もあるという違いがある。一方、「を省  
 略して」の場合、

8 a 先生は、問題1を省略して、問題2を解説した。

b 先生は、問題1を省略した。そして、問題2を解説した。

aは、bのように単文でも表し得るように、「省略する」という動詞  
 を、副詞句として用いたものであって、特に文法化しているといふこ  
 とはない。本稿は、文法化の度合の低いものも合わせてとりあげるこ  
 とがある。

複合副助詞は、次のbのように連体関係を形成するものもある。

9 a お茶の代わりに、ビールを飲む。

b お茶代わりのビールは、すぐなくなった。

ともに「飲む(可能性のある)もの」として「お茶」「ビール」が範列  
 関係にあるが、本稿では、副詞句を形成するものを中心に扱う。

副助詞・係助詞による範列関係は、格関係と両立する。複合副助詞  
 の中にも、次のように格助詞と共起するか、共起しなくてもそこに格  
 関係を読み込むことができるものがある。

10 親にだけでなく、友だちにも話しておいた。

11 本人にしてから(が)やる気が全くないのだから、周りの人間が  
 やるはずはない。

10は「に」と共起し、11は「が」が任意である。1の「に限って」も  
 「うちの子」が主格に立っていると見える。しかし一方で、「に加えて」  
 の場合、2の例の上接名詞「筆記試験」は格関係を担っていない。以  
 下に取り上げる複合格助詞の場合も、多くは「に加えて」と同じく格  
 関係を担わず、副詞句として働く。

二・複合副助詞による関係列範

以下、意味的な分類をして、該当する複合副助詞を挙げていく。

(ア)限定——に「限って・に限り、ならでは

12 うちの子に「限って」、そんなことはしません。(——)

13 その日に「限って」早く目がさめたのも、何かの因縁かもしれない。

14 早死にするようなやつに「限って」スポーツマンであった。

(會野綾子「太郎物語」)

15 米国ではこのほか8州・特別区で、重病患者に「限って」マリファ

ナ使用を認めている。(毎日新聞二〇〇〇・四・二七 朝刊)

「Aに「限って」P」は12・13のように「だけは」や「だけ」に言い換えられることが多く、Pに該当する範囲が唯一Aであることを表す。但

し、「だけ」に比べて用法が限定されていて、良い意味であれ悪い意

味であれ、Aが特別・特徴的な存在だという意味合いを持つ場合に用

いられることが多い。具体的には、次のような用法がある。一つ目は、

12のように否定文で用いられ、「AはPない」と表示すると、「Aは

Pに該当すると考えられているかもしれないが、実際はそうではなく、

特別なAだけはPに該当しない」ということを表す。次の16は12と同

様に先行文脈を否定するもので「に「限って」は自然だが、17はそうい

う意味を伴う文脈ではなく、「に「限って」は不自然である。

16 太郎は時間に正確ですから、彼に「限って」会議に遅刻するなんて

ことはありません。

17 きこの会議があつて、太郎(？)に「限って」だけが(？)会議に遅刻  
した／しなかつた。

二つ目の用法は、13のようにAが時や機会に関わる語で、「普通なら  
ば他の時と同じく、Aの時にもPが成り立たないと予想・期待される  
が、実際はそのAの時にだけPが成り立つ」という関係を表す。

18 彼は、その日(だけ)に「限って」車で来ていた。

19 彼は、その日(だけ)に「限って」車で行くつもりだ。

19が不自然なのは、これが未来の予定を表すものであるため、予想・  
期待に反するという文脈にならないからである。三つ目の用法は、14

あるいは次の20のように、「普通ならばAはPに該当しないことが予  
想・期待されるが、現実には他よりもAがPに該当する」という関係  
を表す。

20 源氏のくせで、恋してはならぬ人に「限って」胸が鳴り、心ときめ

くのだから、始末がわるいのである。(田辺聖子「新源氏物語」)

Aには、そこからPの否定が予想・期待されるような内容を伴ってい

る必要がある。四つ目の用法は、15のように「Aだけ特別扱いとして

Pをする」という意味で用いられる。次はbは特別扱いではないので、

「に「限って」が不自然である。

21 女性に「限って」(a 入ることができ／b ? 入れない)。

「に「限って」は「に「限って」の文章語的・公的な形で、四つ目の用法

で用いられることが多い。

22 社会集团的所有における対象となるべき私有は、労働手段と労

働条件が私人のものである場合に限り許される。

(新田次郎「孤高の人」)

- 23 灘の酒造家より、お取引先に限り、酒荷船に大阪まで無料にてお乗せいたします。  
(林美美子「放浪記」)

- (ア)限定に属するものとしてもう一つ「ならでは」がある。これは、  
24 当店ならではのサーヴィスを心がけております。

森田・松木(同：69)も述べるように、「くでなくてはできない」「く以外にはできない」というように、他を排除するだけでなく、不可能の意味を含み込んでいる。

- (イ)到達点——に至るまで・に至っては

- 25 社長から派遣社員に至るまで、徹夜で働いた。

- 26 家族も同僚も危険だからやめると大反対。上の兄に至っては、死んでも骨は拾ってやらんと言う始末。

「に至るまで」は序列の終端を示し、始発を表す「から」とともに、「BからAに至るまでP」という形で、Pに当てはまる複数のものの範囲を表している。「まで」に比べて、該当する序列の末尾までという意味合いが強く、次のような例には用いにくい。

- 27 社長から係長(までは／＼)に至るまでは働いたが、それ以下は働かなかった。

「に至って」は、「BもP、Aに至ってはP」という形で、「通常のBもP、極端なAはさらにPの度が強い」という関係を表す。

- (ア)限定と(イ)到達点は、Pに当てはまる範囲を表す点で共通し、

Aはその範囲の境界を示す。これに対して、次の(ウ)(エ)は、AがPに当てはまるものの代表を示すという関係にある。(ア)(イ)を「範囲型」、(ウ)(エ)を「代表型」と呼ぶ。

(ウ)順序——を皮切りに・を手始めに・を発端に・を頭に、(の)前に・(の)後に・(の)次に・に続いて

- 28 清掃サービスを皮切りに、給食サービスや介護サービスなど、次々と新しい事業に進出していった。

- 29 高校二年生を頭に、中学三年生・小学六年生・幼稚園児と四人がお年玉をねだりに来る。

- 30 三郎の次にゆかり、ゆかりの後に卓也が歌う。

「Aを皮切りにB・CがP」で代表すると、複数のものの中でAを「皮切り(初め)」と位置づけ、その他のものをAに続いて時間順(逆順も含む)に並べて、順にPに当てはまることを表す(但しB・C……がBだけという場合もある)。

(エ)序列——を中心に・を核に・を柱に・をはじめ(として)・を筆頭に・を代表として・を最高に・を頂点に

- 31 この研究は、助手を中心に、大学院生たちが取り組んでいる。

- 32 祝宴には、恩師の山田先生をはじめとして、先輩・後輩たち、同僚たちが出席した。

- 33 山田さんの四八九点を筆頭に、田中の四七八点、中山の四七一点など、多くの生徒が高得点を取った。

- 34 平成一二年の大会の四九校を頂点に、一三年の四五校、一四年

の三九校と、参加校が年々減少している。

「AをはじめB・CがP」で代表すると、Pに当てはまるものの中で、Aが最も重要度や価値が高く、B・Cはそれに次ぐという序列が構成されることを表す。<sup>(32)</sup>

32 に対して、

35 祝宴には山田先生でさえ出席した。

のように「でさえ」を用いると、「山田先生」が「出席する」に当てはまりにくいと考えられる極端な存在と位置づけられるが、32の場合には、「山田先生」が最も出席するにふさわしく、当然出席すると想定される存在と位置づけられる。このように典型的・代表的なものを取り上げる点で、極端を表す「(で)さえ」などと補い合う関係にある。(ウ)順序(エ)序列がAとB・C……という多項間の関係を表すものであるのに対し、以下のものは、「Aを除いてBはP」「Aに加えてBはP」などの形で、PをめぐるAとBと二者の間の関係を表す。

(オ)除外——を除いて・を例外として・を別として・を別格として・を省略して・を省いて・をとばして・を抜きにして・は抜きで・はともかく(として)、を措いて

36 太郎を除いて、みんな上達した。

37 仕事の中の人は別として、大抵の人はその番組を見ていた。

38 この部分はともかく、他のところはよく書けている。

39 この分野で頼めそうな人は、山田教授を措いて他にはいない。

これらは「Aを除いてBはP」で代表すると、「AはPに当てはまら

ないで、BがPに当てはまる」という関係を表す。但し、「を措いて」は「Aを措いてBはpない」という否定文で用いられ、「Aはpに当てはまり、Bはpに当てはまらない」という関係を表す。これは「しにくい」に似ているが、

40 この分野で頼めそうな人は、山田教授しかいない。

「Aしかpない」は「pに当てはまるのはAのみだ」ということを表して、排除するBに直接言及しないが、「を措いて」はBにpが当てはまらないことに直接言及する。

述語が肯定であれ否定であれ、これら「除外」を表す諸形式は、BからAが排除される関係を表すものである。その排除するものを、「例外」扱いにする、「別」扱いにする、「別格」扱いにする、あるいは、「省略」する、また「ともかく」のように考慮外に置くというように、どういう形で除外するかということを明示する。<sup>(37)</sup>

(カ)代替——(の)代わりに・に代わって・の代理で、で(は)なく(て)

41 生クリームの代わりに、牛乳を入れた。

42 私の代理で、山田氏が出てくれた。

43 姉の方ではなくて、妹の方が好きなんだ。

(キ)異なり——と(は)異なって、と(は)異なり、と(は)違って、と(は)違い

44 従来とは異なり、エネルギー効率がよくなっている。

45 あなたと違って、私はデリケートなの。

(ク)「反対——と」(ハ)「反対に・と」(ハ)「逆に」

46 姉と反対に、妹は引っ込み思案だ。

47 酒が入ってだんだん盛り上がっていったが、みんなとは逆に、

私は沈んでいった。

(カ)代替・(キ)異なり・(ク)反対も、(オ)除外と同様で、それぞれ「Aの代わりにBがP」「Aと異なりBがP」「Aと反対にBがP」で代表して表示すると、いずれも、「AはPに当てはまらず、Bが当てはまる」という関係にある。(オ)∪(ク)は単純化すれば、同内容のこゝとを対比の「は」によって、「AはPではないが、BはP」のように表すことができる。例えば、36は「太郎は上達しないが、みんなは上達した」ということを含意する。しかし、(オ)∪(ク)は、そのAとBとの区別のあり方を、それぞれの意味において具体的に示しているのである。

(ア)(イ)の「範囲型」と(ウ)(エ)の「代表型」は、A及びB・C…がPに当てはまる・当てはまらないという多項間の関係である。それに対して、(オ)∪(ク)は二項間の関係で、AとBとが排除・区別される関係にある。これを「二者型」と呼ぶことにする。(オ)除外の場合、AがPに当てはまらないのに対し、A以外はみなPに当てはまるのであるから、(ア)限定と同じく、「範囲型」に属するようにも見えるが、その関係を「Aを除いてB(≠A以外)はP」のようにA B二者の関係として表しているのである(39と40の違い)。他方、対比の「は」については、これも「AはP、BはP」の形で二者間の関係を表すが、こ

れはPが繰り返されて、並列関係をなすところが(オ)∪(ク)と違う。これを「並列型」と呼ぶ。

さて、「範囲型」「代表型」「二者型」「並列型」という範列項の挙げ方に関する分類軸の他に、もう一つの分類軸が設定できる。それは、AとB・C……とが排除・区別される関係にあるか(「排他型」、包含・同類扱いはされる関係にあるか(「包含型」、そのどちらでもないか(中立型)、という分類である。分類の全体を示した「表」は二五五頁に示す。「範囲型」では(ア)限定が(「排他型」に、(イ)到達点が(「包含型」に属する。「代表型」の(ウ)順序と(エ)序列は、Aで他を代表するのであるから(「包含型」に属する。並列型では、対比「は」が(「排他型」、同類の「も」が(「包含型」である。)

「二者型」の(オ)∪(ク)はどれも(「排他型」に属する。それに対して、(「包含型」に属するものは、以下に挙げる(ケ)∪(ス)である。

(ケ)追加……に加えて・とは別に・だけに・だけでなく・に限らず・のみならず、ばかりか・どころか・はもちろん・はおろか

48 軽井沢(に加えて)とは別に、蓼科にも別荘を持っている。

49 勉強だけでなく、スポーツも万能だ。

50 大阪に限らず、関西の他の地域でもよく見られることだ。

51 あの板前さんは、和食はもちろん、中華もフランス料理もかか  
りの腕前だ。

52 学費はおろか、生活費にも事欠いた。

これらは、「Aに加えてBもP」で代表すると、AがPに当てはまる

ことを前提として、その上にBもPに当てはまることを表す。したがって「Aに加えてBも」「AだけでなくBも」のように「も」と共起することが多い。「追加」に属する形式は種々あり、それぞれの特徴を持つ。「に加えて」と「とは別に」は48のように置き換えられることも多いが、「に加えて」はAとBを同種のもの、「とは別に」はAとBを異種のもの（但しPに当てはまる点は共通）として扱うという違いがある。

53 a みんなとの送別会（とは別に）に加えて、二人だけの送別会をした。

b みんな（とは別に）\*に加えて、二人だけの送別会をした。  
 aは「みんななどの送別会」と「二人だけの送別会」とは「送別会」として共通するので「に加えて」も可能だが、bは「みんな」と「二人」とを累加するという関係ではないので、「に加えて」は用いられない。他方、「だけでなく」「ばかりか」は、成立するのは「A・P」であって、それ以外に成立することを特に想定していない（と話し手が考える）聞き手に対して、「A・P」に限定されないことを示すという含みがある。「に限らず」もその点で同様だが、BがA以外に広い範囲のものを指すことが多い（50では「関西の他の地域」）。「はもちろん」「はおろか」は「A・P」が前提的に成り立っていることを明示的に表す。「はおろか」の方は否定文に偏る。

(10) 同一・類似——と同じく、と同じで、と同様(に)、に似て、みたいに、(の)ように

54 この会社は、同業種の他の会社と同じで、規模が小さい。

55 父親に似て、あいつもとても頑固だ。

56 君も、太郎みたいに丸坊主にしたらいよいよ。

これらは、「AとBとはPの点で同じだ／似ている」という関係を表す。AとBとが包含されるためには、AとBが同一・類似していなければならぬが、これはその関係そのものを表す。

「AみたいにB」「A(の)ようにB」の場合は、AとBが対等ではなく、前者が後者の例になることもある。

57 サッカーのように、スポーツはお金になる。

57の例は、「サッカーなど、スポーツはお金になる。」という例示の「など」に置き換えられるが、

58 a サッカーなど、スポーツはいろいろやった。

b? サッカーのように、スポーツはいろいろやった。

という例では「など」は用いられても「ように」は用いられない。この例では類似関係を成立させる述語(57の「お金になる」)がないからである。<sup>10)</sup>

また、比喻を表す場合、これも同類的な意味を表しはする。

59 このダンサーは、蝶のように舞った。

という例では、「このダンサーが舞う」ことと「蝶が舞う」ことが類似関係にある。しかし、「蝶が舞う」のが現実のことではない点で、他とは異なる。

(サ) 共同・分離——とともに・と一緒に・と連れだって・を連れて・



もろとも、と交互に、と(は)別に・と(は)離れて

60 私、夏休みは、家族と一緒に田舎で過ごします。

61 自転車もろとも、崖の斜面をすべり落ちた。

62 きのお入ってきた新人と交互に店番に立つことになった。

63 私は、他の人とは別に食事をした。

この「共同」というのは、「BはAとともにP」で言えば、Pに当てはまるものとしてBとAとがあるというだけでなく、それが共同してPをすることを表す。62の「と交互に」も共同動作のあり方の一つと理解できる。逆に63のような「分離」は通常なら共同ですることが予想されるところをそうしないという場合である。

(シ)同時——と同時に

64 三番線の列車は、六番線の列車と同時に発車する。

これは、BとAがともにPに当てはまり、かつ、それが時間的に重なるというものである。

(サ)と(シ)とは、(ケ)(コ)と同様に、二者間の同類関係を表すが、これらは共同行為であるとか、同時であるとか、AとBとが現実の時間空間を共有する関係にある。通常、範列関係というのは、時間空間を共有することを含意しない。例えば、「太郎も次郎も試験を受けた。」で言えば、この「試験を受ける」のがたまたま同一会場の試験であることもあるが、そうでないこともある。「太郎も次郎も男だ。」のような属性叙述では時間空間を共有する余地もない。ところが、(サ)(シ)は、その意味として、時間空間を共有することを含み込んでいるのである。

(ス)並置——ともに、を問わず、にかかわらず

65 一位・二位ともに女性です。

「ともに」は「とともに」に形が似ているが、意味用法は異なる。これは「A BともにP」という形で、A B両方がPに当てはまることを表す。AとBの二者とは言っても、ひとまとめに並置されるところが、これまでのものと異なる。これを熟さないが「並置」と呼ぶ。65のように、「とともに」とは違って、時間空間を共有する場合に限らない。「親子ともに」「公私ともに」「自他ともに」「名実ともに」のように慣用句的に用いられるものもある。<sup>11)</sup>

一方、「を問わず」は、

66 国の内外を問わず、広く人材を募集している。

67 好不況にかかわらず、このペースは維持したい。

あるいは、「男女を問わず」「貴賤を問わず」「一世の東西を問わず」「好むと好まざるとにかかわらず」のようにA Bを並置することで、すべてがPであることを表す。66「国の内外」の場合、ある場所は「国」の「内」か「外」かどちらかだが、67「好不況」の場合、「好況」「不況」は連続的である。後者は範列関係とは言えない。この点で「を問わず」は範列関係の体系からは逸脱している(「四、おわりに」を参照)。<sup>12)</sup>

以上は、〈排他型〉か〈包含型〉かのどちらかであったが、次の(セ)(ソ)は、〈中立型〉である。

(セ)以外——以外(に)・(の)ほか(に)

68 a あなた以外に、適任はいません。

b あなた以外に、適任が何人かいます。

69 a 窓口対応のほかに、仕事はない。

b 窓口対応のほかに、売り上げの計算など仕事はいろいろある。

この「以外に」「ほかに」は(オ)除外と同じようにも見えるがそうではない。なぜなら、これらは範列的な他者が排除されるか包含されるかについて中立的だからである。述語が否定の68 a・69 aは「あなた以外には」「窓口対応のほかに」のように対比の「は」が共起でき、述語が肯定の68 b・69 bは「あなた以外にも」「窓口対応のほかに」のように同類の「も」が共起できる。このように両方が可能なのは、AとBそのものが範列関係をなすのではなく、AはBの要素・部分集合として存在するからである。それ故、「A以外／のほかに」が存在する場合も存在しない場合もどちらもあり得る。

(ソ)比較——に比べ(て)・以上(に)・くらいなら

70 太郎に比べて、次郎は背が高い。

71 改革後の方が、改革前以上に問題が多い。

比較関係というのも、範列的な二者間の関係であるが、それ自体の意味としては、他を排除する、包含するという関係を表すものではない。「太郎(ある程度)背が高い」ことと「次郎がより背が高い」こととがともに成立する点では包含的な関係にあると言え、一方で、「次郎は」という対比の「は」が用いられたり、「改革後の方が」という選択指定の「が」が用いられるように、比較項と被比較項とを対立して

捉える面もある。したがって、〈中立型〉に位置づけられる。

以上をまとめると、〈表〉のようになる。それぞれの項目には、代表的な語例を一つだけ挙げてある。へは副助詞・係助詞の語例。

○の項目は複合副助詞になくて、副助詞・係助詞にあるもの。但し、係助詞・副助詞が表す範列関係を網羅しているわけではない。「代表型」の〈包含型〉のところには、暫定的な例示を表す「でも」、否定的評価を表す「など」「なんか」などがある。

〈中立型〉は右に見たように特殊であり、「二者型」の場合にのみある。また、「代表型」は、他も同類として包含するからこそ代表できるのであり、〈包含型〉のみがある。

〈表〉

	排他型	包含型	中立型
範囲型	(ア)限定 「に限って」 〈「だけ」〉	(イ)到達点 「に至るまで」 〈「まで」〉 ○出発点 〈「から」〉	
代表型		(ウ)順序 「を皮切りに」 (エ)序列 「を中心に」 ○極端 〈「さえ」〉 ○例示 〈「など」〉 ○許容 〈「でも」〉	
二者型	(オ)除外 「を除いて」 (カ)代替 「に代わって」 (キ)異なり 「と異なって」 (ク)反対 「と反対に」	(ケ)追加 「に加えて」 (コ)同一・類似 「と同様に」 (サ)共同・分離 「とともに」 (シ)同時 「と同時に」 (ス)並置 「ともに」	(セ)以外 「のほかに」 (ソ)比較 「に比べて」
並列型	○対比〈「は」〉	○同類〈「も」〉	

これらの複合副助詞は、副助詞・係助詞による表現と補い合う関係にある。一つは、一つの項目に副助詞・係助詞も複合副助詞もともに入る場合で、(ア)限定では、「だけ」「ばかり」がこの関係をより一般的に表し、「に限って」「に限り」「ならでは」はより特殊な関係を表す。(イ)到達点も「まで」が一般的で「至るまで」は特殊である。もう一つは、こちらの方が大きな比重を占めるが、複合副助詞が、副助詞・係助詞と直接対応しない場合である。(ウ)(エ)以下の項目は、それぞれ、○を付した項目と別の意味を表すものである。特に、「二者型」は複合副助詞によって多様な表現が可能になっている。

本稿は「範列関係」という用語を用い、「とりたて」という用語を用いていない。後者は、係助詞・副助詞の中でも、対比の「は」や限定の「だけ」など、当該項目を特に取り上げるといふ意味合いの強いものにはふさわしいが、例示の「など」のように、そういう意味合いの弱いものにはあまりふさわしくない(丹羽二〇〇一、注一)。かつ、本稿によって付け加えられた範列関係の多くは、AとBの広い意味での異同関係を表すものであり、やはり「とりたて」と呼ぶにはふさわしくないのである。

### 三、接続助詞との関係

#### 三・一 「部分型」と「全体型」

副助詞・係助詞が範列関係を表すという場合、述語を共有して格項

目<sub>1</sub>が範列関係をなす場合と、格項目と述語全体合わせて範列関係をなす場合がある。

72 a 太郎<sub>1</sub>だけ参加して、次郎は参加しない。

b 太郎が参加するだけで、次郎は参加しない。

73 テレビのニュースだけ見て、新聞などは読まない。

72 a の前件は、「参加する」という述語に当てはまる・当てはまらないという関係において、「太郎」が後件の「次郎」と範列関係にある。

72 b は、当該文脈・状況において成り立つこととして「太郎が参加する(こと)」は成り立ち、「次郎が参加する(こと)」は成り立たないという点で、前者は後者と範列関係にある。73 は述語が異なっており、「だけ」は名詞についているものの、意味的には「テレビのニュースを見ること」が「新聞などを読むこと」と範列関係をなす。以下、72

a の関係を「部分型」の範列関係、72 b・73 の関係を「全体型」の範列関係と呼ぶ。この二つがあることは、複合副助詞でも同様で、

74 a 太郎に加えて、次郎も参加した。

b 太郎の参加に加えて、次郎も参加した。

c 太郎が参加したのに加えて、次郎も参加した。

75 テレビのニュースを見ないのに加えて、新聞を読むこともない。

74 a は「部分型」、74 b c と 75 は「全体型」である。

ところで、74 c・75 の「に加えて」は、前節と後節とを接続する働きをしているということもでき、「に加えて」は複合接続助詞であるということもできる。(ア)〜(ソ)の中には全体型が可能なのが多く、

それらはやはり接続助詞と呼ぶこともできる。以下、「全体型」が可能な項目について、一例ずつ挙げる。

(ウ)順序

76 清掃サービスを始めたのを皮切りに、給食サービスや介護サー

ビスなど、新しい事業に進出していった。

(エ)序列

77 祝宴では、恩師の山田先生が秘話をご披露なさったのをはじめ、

先輩・後輩たちや同僚たちが、いろいろな趣向で盛り上げた。

(オ)除外

78 上曜日に用事があるのを除いて、他の日は空いています。

(カ)代替

79 大学に行く代わりに、専門学校に行った。<sup>(原)</sup>

(キ)異なり

80 あなたががさつなのと違って、私はデリケートなの。

(ク)反対

81 都会の人たちがあくせくしているのと反対に、このあたりの人

は至ってのんびりしている。

(ケ)追加

82 事業に協力してくれるというだけでなく、多額の資金援助も申

し出てくれた。

(コ)同一・類似

83 他社がどこも業績が低迷しているのと同じく、我が社もひとこ

ろよりかなり状況が悪くなっている。

(サ)共同・分離

84 選手が入場するとともに、審判団も審判席に着席した。

(シ)同時

85 三番線の列車が発車すると同時に、六番線の列車が発車する。

以上のように、「部分型」の範列関係を表すものの多くは、「全体型」の範列関係を表すこともできる。ただ、助詞によっては、「全体型」のみ、「部分型」のみを表し得るというものもある。(ク)反対において、「に反して」に類似する「に對して」は、「全体型」には用いられないが、「部分型」は86 aのように不自然である。<sup>(原)</sup>

86 a 妹は、姉(と反対に)に對して、引っ込み思案だ。

b 姉(と反対に)に對して、妹は引っ込み思案だ。

c 姉が活発なの(と反対に)に對して、妹は引っ込み思案だ。

aと語順の異なるbの「に對して」はそう不自然ではないが、「活発な姉に對して」のようにcの事柄を読み込んで理解している可能性もある(つまり、より接続助詞的)。他方、(カ)代替の「代理で」は「部分型」のみである。

87 父の(代わりに)代理で、私が葬式に出る。

88 父が出られない(代わりに)代理で、私が葬式に出る。

「に對して」は接続助詞、「代理で」は副助詞と区別することは可能ではあるが、あくまで個々の語彙的な問題である。

三、二 接続助詞が表す三つの関係

複合副助詞の全体型は、右に例示してきたものを見ればわかるように、接続助詞であると言ってもよいものである。これは、言い換えれば、接続助詞の表す意味関係の一つとして範列関係があるということである。接続助詞が表す意味関係は、少なくとも三つの関係が区別できる。

(1) 前件と後件とが条件的な関係をつなぐ場合。

仮定条件「ば」「なら」「たら」「と」・原因理由「ので」「から」・契機「たら」「と」や逆接「が」「のに」「ても」などが挙げられる。複合接続助詞と言いつても得るものの中にも、「仮定条件」「とすれば」「としたら」「とすると」、原因理由「からには」「以上は」「のだから」、逆接「にもかかわらず」「としても」等々、この関係を表すものも多い。

(2) 前件と後件が時間的、あるいは、場面的な関係にある場合。

時間関係には、前件と後件が広く同時的な関係にある場合「〜時(に)」、前件と後件とが継起的に接する場合「〜途端に」「〜瞬間」「〜や否や」、前件が後件に先立つ場合「〜後に、〜て以来」、前件の時間内に後件が成立する場合「〜うちに」「〜間に」「〜途中で」「〜最中に」、後件が前件に先立つ場合「〜前に」「〜以前に」「〜に先だって」などがある。また、「〜ところに」「〜ところで」は、前件と後件とが同じ空間・時間にある、つまり同じ場面を共有する関係にあるものである。

(3) 全体型の範列関係。三、一節に挙げたもの。

接続助詞が表す接続関係というと、(1)および(2)が専ら問題にされ

ることが多いが、それ以外に、(3)の関係を加えることができるのである。

なお、右の(サ)共同・分離と(シ)同時は、84「選手が入場するとともに、審判団も審判席に着席した。」、85「三番線の列車が発車するのと同時に、六番線の列車が発車する。」など、時間・場面関係をも表している。

接続関係を表す形式は、節に下接するだけでなく、語に下接するということも珍しくない。接続詞(自立語)においても、

89 太郎、次郎、そして、三郎に聞いてみた。

のように語と語(名詞と名詞)をつなぐ用法もある。助詞の場合も同様で、90・91は仮定条件・原因理由、92は時間・場面関係を表す接続助詞で、語に接続する用法である。

90 太郎ならわかるだろう。

91 貧乏故に、こんな目に合わなければいけないのか？

92 帰宅途中にちょっと立ち寄った。

このように語にも節にもつき得るという点では、(1)〜(3)いずれも、副助詞とも接続助詞とも呼べるということにもなる。しかしながら、この三者が同じように副助詞であるとか接続助詞であるとかというようには、やはり考えにくい。(1)の前件と後件とが条件的な関係を結ぶタイプのは、節と節の関係であるのが基本で、90・91のような語に接続するのは派生的な用法であろう。90は「解答するのが太郎であるなら」、91は「私が貧乏である故に」というように、事柄とし

ての意味を読み込んで解釈される。また(2)の時間・場面的な関係を表すものも、92の「帰宅」が語であるとはいえず、事柄を表すものであるように、やはり、節と節の関係を表す方が基本であると言える。

(1)(2)とも、語を節に還元して解釈されるのである。それに対して、(3)の範列関係は、部分型の場合は述語を共有することにより、全体型の場合は意味的に同類と括ることができることによって成り立ち得る関係であり、その点で両者は対等である。以上のように、(1)～(3)のうちで、(1)(2)が接続助詞的、(3)が副助詞的なのである。

#### 四. おわりに

範列関係を表す副助詞(接続助詞)に対応して、範列関係を表す副詞(接続詞)もある。例えば、複合副助詞「に加えて」、「(の)代わりに」に対応して、副詞「加えて」「代わりに」がある。

93 a 太郎、次郎、加えて、三郎が候補に挙がっている。

b 太郎や次郎が候補に挙がっている。加えて、三郎も候補に挙がっている。

94 山田先生はお休みだ。代わりに、田中先生が来られた。

「加えて」は語と語を結ぶ用法もあり、節と節(文と文)を結ぶ用法もあるのに対し、「代わりに」は節と節(文と文)を結ぶ用法のみである。このように語彙化していなくても、

95 三郎が歌い、その次にゆかり、その後に卓也が歌った。

96 上曜日に用事がある。それを除いて、他の日は空いています。

のように指示語を用いることで、副詞句(接続詞句)が形成できる。また、これとは別に、範列関係を表す副詞として、「ただ」「専ら」「まさに」「特に」「おもに」「例えば」等々の「限定副詞」というものが工藤(一九七七)によって指摘されている。

他方、範列関係は程度量関係と連続的な面がある(丹羽一九九二)。

97 a 今回に限り、変更が可能です。

b 半年間に限り、変更が可能です。

98 a 菌類から哺乳類に至るまで様々な種類がある。

b 体長二〇センチから二メートルに至るまで様々な種類がある。

aが範列関係、bが程度量関係である。bのような連続的な関係としては時間関係もある。

99 朝九時から夜中の十二時に至るまで、問い合わせが続いた。

また、次の「前に」において、aは(ウ)順序に属する範列関係、bは時間関係である。

100 a 太郎の前に、次郎が来た。

b 太郎が来る少し前に、次郎が来た。

副詞(接続詞)と副助詞(接続助詞)との相互関係、範列関係・程度量関係・時間関係などの相互関係(丹羽二〇〇一も参照)、これらを総合的に考えていくことが要請される。

【注】

- (1) 本稿で扱う複合助詞を「複合副助詞」と名づける理由は二つある。一つは、これらの多くが副詞句を形成するものであり、副詞的な助詞という意味で「複合副助詞」の名前がふさわしい。もう一つは、範列関係を表す副助詞と係助詞の違いについて、筆者は、対比「は」や同類「も」など何らかの点で焦点を表示する機能を持つものを係助詞に、そうでないものを副助詞に分類している(丹羽二〇〇六)。本稿で扱う複合助詞は、特に焦点表示に関わらないものであり、その点でも(「複合係助詞」でなく)「複合副助詞」がふさわしい。
- (2) 森田・松木(同:62,78)の「副助詞の働きをするもの」にはかなり広い範囲の複合辞が挙げられている。例えば、「強調」という項目には、「今日という今日は……」の「と」、「誰一人として」の「として」、「ありがた」ことには「ことには」なども含む。
- (3) 「に限って言えば／言うと」という複合形式の場合は、Aが特別という意味合いを特に持たない。  
哺乳類という分野に限っていうと、単角あるいは奇数角を有する動物はきわめて稀な存在であり、  
(村上春樹「世界の終わりとハードボイルドワンダーランド」)  
(4) 述語を少し変えて、  
清掃サービスを皮切りに、給食サービスマヤ介護サービスマヤ、次々と事業を拡大していった。  
では、「清掃サービス」「給食サービス」「介護サービス」が「事業を拡大する」に当てはまるという関係ではない。しかし、「清掃サービス」「給食サービス」「介護サービス」それぞれに「進出する」ことによって、「事業を拡大する」ことになる。こういうものもここでは範列関係として扱う。
- (5) 次のようにAのみが示される場合もあるが、  
この研究チームは、山田助手を中心に構成されている。  
これも「山田助手を中心に、田中教授や中山講師によって構成されている」のように補うことができる。
- (6) 「を最後に」という形式は、「を始めに」などと異なるところがある。  
五十回大会を最後に、彼は出場を取りやめた。  
これは、「五十回大会への上場を最後に」ということで、「取りやめた」をめぐる範列関係でなく、「出場」をめぐる範列関係をなしている。
- (7) 森田・松木(一九八九:74)に、「副助詞の働きをするもの」の一つとして「除外」という項目があり、

住民の不安をよそに、そこに石油工場の建設が進められている。  
のような「をよそに」が挙げられている。これは「ある事物を直接関係のないものとして自分の意識や視野から除外する」という意味であり、範列的な他者を除外するという意味ではないので、本稿で扱う範囲外のものがある。もちろん、「住民の不安をよそに」という副詞句がどのように位置づけられるかという問題は残る。

- (8) 「予想と反対に」「考えていたことと違って」など範列関係でない用法もある。
- (9) (「排他型」(包含型)という区別は、沼田(一九八六:121,123)の「他者否定」「他者肯定」と同種のものである。
- (10) 「ような」という連体形の場合は、「サッカーのようなスポーツはいろいろやった。」は可能である。「ように」に比べて「ような」は例示を表す形式として慣用化していると言える。
- (11) 「親子ともども元気です。」の「ともども」は、時空間を共有する場合に用いられ、(サ)共同・分離に属するとも言える。
- (12) 「を問わず」には、「季節を問わず」「理由の如何を問わず」のように、67とは別の意味において範列関係を表さないという用法もある。これらは、「季節」「理由の如何」に内在する要素が複数想定されるが、本稿で言う範列関係とは文の要素間の関係であるので、これらとは関係が異なる。
- (13) 格助詞と副助詞は連続的な面がある。(ソ)比較の場合、「これよりあれの方が大きい。」などという比較関係は「Aより、Bが、比較述語P」という格体制をなすと理解できる。しかしそれと同時に、「A・P」と「B・P」の範列関係であるという把握もできる。したがって、「より」は格助詞であると同時に副助詞であるとも言える。複合助詞の「に比べて」も、それは同じである。  
他に、「から」や「まで」などについても同様で、  
東京から大阪まで駅の写真を撮って来た。  
これらは述語に対するカラ格、マデ格と言ってよいが、同時に、この例においては「東京で写真を撮り、有楽町で写真を撮り、……」という範列関係の両端を取り上げているとも言える。
- (14) 「一部分型」「全体型」の区別は、述語を共有する名詞間の範列関係であるか、述語を共有せず異なる事柄間の範列関係かという区別であり、沼田(一九八六:14,15)の「スコープ」の区別とは、ある程度対応するが同じではない。72a・74aの要件は「一部分型」で「Nスコープ」、73の要件は「全体型」で「Bスコープ」だが、72b・74b・c・75の要件は「全体型」で

「Nスコop」である。

(15) 一代わりに」は、全体型の場合、

彼女のような生き方をしていたんでは、大きな失敗もしない代わりに、  
胸おどるような経験もないだろうね。(日本語文型辞典)

のように、前件と後件に否定的な評価を伴う事柄と肯定的な評価を伴う事柄(あるいはその逆)を並べることによって、逆接的な意味合いが強く出る用法もある。

(16) 「その意見に対して、私はこう思う。」のような「に対しては」は複合格助詞である。

(17) 規範関係を表すものには、並列助詞もある。助詞によって、  
①名詞を受けるもの…「〜と〜」「〜や〜」「〜といい、〜といい」「〜と言わず、〜と言わず」「〜だろうが、〜だろうが」

トムとジェリーが喧嘩した。

姉といい、妹といい、とても気っぶのいい姉妹だ。

②節を受けるもの…「〜たり、〜たり」「〜なり、〜なり」「〜(よ)うが、〜(よ)うが」「〜(よ)うと、〜(よ)うと」「〜(よ)うと」

行ったり来たりする。

泣こうが、喚こうが、俺の知ったことじゃねえ。

③名詞も節も両方受けるもの…「〜とか、〜とか」「〜やら、〜やら」「〜にしても、〜にしても」「〜にして、〜にして」

a 墓参りに、花とか線香とか、いろいろ準備をした。

b パーティーのために、花を買うとか、料理を頼むとか、いろいろ準備をした。

a 医者にしても、看護婦にしても、ミスの危険は常にある。

b 薬を飲むにしても、手術を受けるにしても、それぞれリスクはある。

意味的には、これらは、いずれも並列されたものがともに成り立つという〈包含型〉である。「方、〈排他型〉は、「〜か、〜か」のみである。

a 私があなたか、どちらが勝つだろう。

b 私が勝つか、あなたが勝つか、どちらだろう。

【文献】

工藤 浩(一九七七)「限定副詞の機能」『松村明博士選歴記念論文集 国語学と国語史』(明治書院)

グループ・ジャマシイ編著(一九九八)『教師と学習者のための日本語文型辞典』(くろしお出版)

丹羽哲也(一九九二)「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』四四巻

一三分冊(大阪市立大学)

——(二〇〇二)「取り立て」の範囲」『国文学 解釈と教材の研究』四

六巻二号(學燈社)

——(二〇〇六)「取り立て」の概念と「取り立て助詞」の設定をめぐっ

て」『文学史研究』四六号(大阪市立大学)

沼田善子(一九八六)「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』(凡人社)

村木新次郎(一九八三)「地図をたよりに、人をたずねる」という言いかた」

渡辺実編『副用語の研究』(明治書院)

森田良行・松木正恵(一九八九)『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味

と用法』(アルク)

小説の用例は「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」、新聞の用例は「CD-ROM版 日新聞二〇〇〇データ集」による。

【06年9月22日受付、10月11日受理】